
真実の気持ち

枚方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実の気持ち

【Nコード】

N1207A

【作者名】

枚方

【あらすじ】

未完成の解毒剤をコナンに託した灰原：その偶発的な副作用で、コナンの体が透明になってしまう【あらすじ一回変更】

（前書き）

連載に詰まりながら気分転換に書きました…（おいおい）
現実の気持ちは、どうぞご覧下さい！

「灰原、まだか？」

俺は待ちきれずに立ち上がって訪ねた。

「おい工藤、もうちよつと待つとけ！」

服部もおのずと気分が高揚している。

「あと少しよ…、静かにしてて。」

灰原は、二人に背を向けながら何かの作業を行っている。

ここは、地下にある灰原の部屋だ。

部屋と言っても、専ら研究室の様な設備があり、まるでどこかの研究所の様になっている。

隣には、俺の良き友でありライバルでもある服部平次がいる。

時には助け合い、また時には推理勝負を起こしたりするが、今では良きパートナーである。

そして、俺に背を向けて作業をしているのが、元組織の一員だった灰原哀である。

彼女は今日、A P T X 4 8 6 9 の解毒剤を試すと言う理由で、俺を地下室に呼んでいた。

「貴方達、悪いけど一階で待っていてくれない？」

灰原は大きな溜め息をつく、背を向けたまま俺達に言った。

「何でだ？もう完成したんじゃないのか？」

俺は、灰原の方を見ながら言った。

「これから薬の調合するから、失敗は許されないのよ？」

灰原は少し疲れている様子だった。

「そうか…、じゃ後でまた来るからな！」

「ほな頑張れよ！ちっこい姉ちゃん！」

そう言い残し、俺と服部は地下室を出た。

階段を上がり一階に出た俺達は、とりあえず側にあったソファ―に腰を下ろした。

「いよいよやな！気分はどうや？」

一息ついた後、服部はいきなり言った。

「ああ…と言つても、まだ試作品だけだな。」

俺は服部の質問に、素直に答えた。

「まさかあの姉ちゃん…お前んとこ実験台にするつもりやったりしてな。」

服部は笑いながら俺に言った。

「まさか！灰原に限ってそんな事ねえよ！」

灰原の気持ちを知っていた俺は、必死に服部の言葉を否定した。

「ほんなら、死んでも悔いは無いか？」

俺はその言葉に一瞬ドキツとした。

「それは…」

なかなか上手く言葉が出て来なかった。

灰原を疑いたくは無いのだが、服部の言うことも一里ある。

恐らく、生半可な気持ちで薬を飲むなど言いたかったのだろう。

「……何てな、この勝負俺の勝ちやな！」

突然訳の分からない事を言う服部を見て、俺は更に困惑してしまつた。

「勝負？」

「探偵に必要な弁論術を試してみたんやで、気付かんかったか？」

勝ち誇った表情で服部は言った。

「はあ？俺が本気になつたらお前なんか負けねえぞ！」

俺は服部を見ながらムキになって言った。

「それはどうか分からんで？とりあえず今回は俺の勝ちやな！」

服部は、ソファーから立ち上がると挑発するように言った。

「うつせー！…そういうばお前、何でここにいるんだよ？」

俺は話題を変える為、服部に簡単な質問をした。

「何や、お前が電話して来たんやろ？」

服部は再びソファーに座ると、すぐに答えた。

「でも来いなんて言つてねーぞ？」

俺は記憶を辿りながら答えた。

考えてみれば、確かに連絡を入れたが、来いと言った記憶は無い。

「ええやん！俺とお前の中やぞ？」

服部は当たり前前の様に親友扱いしていた。

「それにな…何か胸騒ぎがしたんや。」

その言葉に、またもや不安を感じた。

「胸騒ぎ？」

俺は、たった一言の言葉で訪ねた。

「そうや、だから気を付けた方がええぞ。」

さっきの服部の真面目な表情も、その胸騒ぎのせいだったと言う事が分かった。

「バー口。俺が死ぬなんてありえねえよ！」

俺はいつもより少し大きな声で言った。

「せやな！心気臭い話はやめや！」

服部も、不安を払う様に明るく振る舞っていた。

「あのなあ、お前が話始めたんだろーが！」

「ハハハ！そーいやそーやったな。」

他愛も無い会話だが、それでも幾分心の準備を整える事が出来た。

やがて灰原が疲れた表情のまま一階に上がって来た。

「出来たわよ。さあ、付いて来て。」

それだけ伝えると、そそくさと地下室に降りていってしまった。

「おいおい…相変わらず早ええな。」

姿の見えなくなった灰原を追って、俺達も地下室に向かった。

再び部屋に入ってみると、正面のテーブルにカプセルが置かれていた。

「これは、一体何の薬なんだ？」

俺は、不安と好奇心が混ざった心境のまま灰原に訪ねた。

「一応、APTX4869の解毒剤よ。まだ試作品だけど、戻る時の痛みは無いわ。」

淡々と説明している灰原に、どうしても聞いて置かなければならな

い事があつた。

「…まさか、死ぬなんて事は無いよな？」

俺はゆっくりした口調で訪ねた。

別に薬を恐れてはいないのだが、どうしても気になってしまつ。

「もちろんよ。万が一にもそんな事は無いから安心して。」

灰原はいつもと変わらず冷静に答えた。

「よっしゃ！なら早速飲んでみたらええ！」

それを聞くと、服部はテーブルに置いてあつた薬をおもむろに手に取り、俺に手渡した。

「じゃあ、飲むぞ…」

周りに緊張が流れる。さっきまでの賑やかさは既に消え、沈黙が訪れた。

「よし、せーの！」

気合いを入れて一気に薬を飲み込んだ。

痛みも無いので、自分では変化が起きたかどうか分からない。

「おい服部、俺はどうなったんだ？」

とりあえず近くにいた服部に聞いてみた。しかし、服部の返事は驚くべき内容だった。

「工藤…？お前、姿消えてるで…」

最初は、笑えない冗談を言っているとは思えなかった。

そこで、灰原に聞いてみる事にした。

「灰原、どうだ…？」

だが、返事は服部と全く同じだった。

「消えてるわ…、一体どういう事…？」

そこで、近くにあつた鏡を手に取り自分の顔を覗いてみる。

「うわっ！本当に消えてやがる！！…何か大変な事になりそうだな…。」
「…相当なショックを受けたが、俺は改めて自分が消えた事を認識した。」

とりあえず俺達は、気持ちを落ち着かせる為に一階へ上がった。
「工藤、居てるか？」

服部が、位置を確認するように言う。

姿が見えないので、声で位置を把握するしか無いのだ。

「ちゃんと居るよ。にしても、これは一体どういう事だ？」

俺はソファーに深く腰掛けながら訪ねた。

「さあ、私には分からないわ…。おそらく偶発的な作用で体の色素が透明になったのかもね。」

灰原はあくまで冷静に見解を述べている。

それにしても、元に戻るわけでも無く、ただ単純に透明になっただけである。

そこで、自分にとって一番重要な問題を聞いてみる事にした。

「なあ、俺はいつ元に戻るんだ？」

少し睨みを利かせながら訪ねた。

最も、二人には全く見えていないのだが…。

「まあ、薬の分量から計算すると…約三時間で元に戻るわね。」

暫し考えた後、灰原は静かに言った。

今の時刻を見ると、三時を回った所だ。

「三時間：つーと大体夕方六時だな。」

俺は部屋の時計を眺めながら言った。

思っていたより早かったので、幾分安心出来た。

「案外短いやんけ！せや工藤、今から外遊びに行かへんか？」

またしても予想外の考えを出した服部に、俺だけで無く灰原も驚いた様子だった。

「はあ！？お前いきなり何言い出すんだよ！」

その言葉に、思わず大声で怒鳴っていた。

「服部君、一体何を考えているのよ？」

灰原もかなり驚いた様子だった。

「ええやん！何か楽しそうだと思わへんか？」

服部は、悪びれる様子も無く答えた。

それから三人で話し合った結果、服部の考えが優先される事になった。

服部の巧みな話術に、俺と灰原は上手く丸め込まれたのだ。

「じゃあ、五時までには戻って来てね。」

玄関で灰原に見送られた俺達は、早速外に向かって歩き始めた。
「んで？何をするつもりなんだ？」

俺は、服部の隣で確認するように言った。

この姿じゃサッカーも何も出来ないの、かなり不便である。

「せやなあ…。まあ、透明になった今しか出来ない事やるな。」

「…まさかお前、俺使って覗きとかするつもりじゃないよな？」

また馬鹿馬鹿しい考えをしていないか、何気無く聞いてみた。

「アホ！！俺がそんなけつたいな事する風に見えるか？」

冗談のつもりだったのだが、服部は必死に否定していた。

「じゃあ何すんだよ？俺は透明だし、お前は危険な行動しないように灰原に言われただろ。」

俺の言葉を聞いて歩を止めた服部は、ある一つの提案を出した。

「こうなったら、お前の好きな奴の本音を探るっちゅうのはどうや
？」

そう話す服部の顔は、何かを企んでいる様に見て取れる。

「例えば、あの灰原とか言う姉ちゃん…お前の事えらい気にしてる様に見えるで？」

まるで人の考えを読んでいる様に、服部は自分の考えを語った。

「あのなあ…何で俺と灰原をくつつけようとしてんだよ？」

確かに俺自身、灰原の事は少し気になっている様な気がする。

「何や、今しか出来ひんチャンスやで？」

服部の言葉が、俺の背中を押した。

灰原とは、危険を犯しながら、共に組織と戦って来た事もあった。
蘭に正体がバレそうになった時も、あいつに助けてもらった。

「お前、この事もし他人に言ったらどうなるか分かるよな…？」

殺気を込めて俺は服部に詰め寄った。

「当たり前やろ！男と男の約束や！」

少したじろぎながら、服部は手を差し出した。

「俺はこれから博士の家に行くけど、お前はどうすんだ？」

俺は服部と握手を交わしながら訪ねた。

「せやなあ…、まあとにかく、終わったら携帯に連絡よこしたらええ。」

服部は手を離すと、右のポケットを叩いた。

「ほなな工藤！しっかりやるんやぞ！」

「わあつてるよ！じゃあ後でな。」

そして服部と一旦別れると、お互い別々の行動を取った。

俺はさつき来た道を急いで戻った。既に時間もかなり経過してしまっていたからだ。

俺は阿笠邸に戻るとまず裏口に回り込んだ。

そつと聞き耳を立ててみたが、物音は全く聞こえて来ない。

「人の気配は…どうやら無いみてえだな。灰原は出かけたのか？」

一人小声で呟く。人の気配が無いので、早速家の中に入る事にした。物音を立てないようにそつと中に入るが、思った通り一階には誰もいなかった。

（あいつの性格から推理すると…、地下室に何かがあるな。）

そんな事を考えながら俺は地下への階段を降りて行った。

やがて地下室の扉の前まで辿り着いた。

しかし、まだまだ油断は出来ない。

中に灰原がいるかもしれないし、探りを入れている内に帰って来るかもしれない。

そう考えると、早目に終わらせる必要がある。

（入るか…灰原、中にいるんじゃないぞ。）

祈る気持ちでドアノブを回した。

ギィィ、という音を立てて扉がゆっくりと前に開く。

部屋には誰もいない。

（よし…、そんじゃ早めに探すとすつか！）

俺は静かに扉を閉めると素早く部屋を見回した。

部屋の机には、無造作に試験管や実験器具が並べられている。

（あいつ、一体どんな研究してんだ？）

そう思いながら更に部屋を見渡すと、ふいに本棚が目飛び込んで来た。

（本棚…か。）

ゆっくり近寄ると、どんな本があるのか一冊一冊確認してみた。

（何何、B19ウイルスによるG2期停止ならびにアポトーシス誘導のメカニズム…？）

改めて確認したが、やはりその殆んどが薬に関する研究資料だった。その中に一冊だけ、表紙に何も書かれていない本があった。

（何だ？）

何と無くそれを手に取ってみる。外見では、何も書かれていない真っ白なノートだ。

パラパラとページをめくると、過去の様子が書いてあった。

（これは…日記だ！）

俺はその答えに確信を持った。

そして、無意識のまま日記に目を通した。

《三月二十五日：今日は殺人事件に巻き込まれ、人が一人死んだ…もう遺体は見たく無い…。でも、彼はいつもの様に姿を欺き事件を解決してた。そんな彼がとても素敵に見えた。このままずっと一緒にいたい…。でも、いつかは別れる日が来るのよね。》

さらにページをめくって中を見た。

《四月十三日：今日は少年探偵団五人で公園に集まって遊んだ。最初私は断ったけれど、彼はわざわざ家まで来て優しく誘ってくれた…。その時は冷たく接してしまっただけ、本当は凄く嬉しかった。素直になれない自分が嫌い…。》

その中には、灰原の思いや日々の行動の様子が赤裸々に書いてあった。

俺は、直ぐに読むのを止めて日記を元の場所にそっと戻した。

（何で…、俺はなぜこんな事をしてんだ…？）

不意に、罪悪感が全身を襲った。

いくら服部にそそのかされたとは言え、こんな事をして許されるはずが無い。

他人の秘密に介入する権利は、俺には無いはずなのに…。何て事をしてしまったんだと、心の底から責任を感じた。

そして…、自分の気持ちにやっと気が付いた。

（そうか…俺は、灰原の事が好きなんだ。）

俺が言わない限り、この素直な気持ちは、灰原に届く事は無い…。そう考えると、何だかほっとした。

「悪かったな、こんな事しちゃって。」

無人の研究所に、自分の声が小さく響いた。

やがて日も傾き、元の姿に戻る時間が来た。

俺はあの後服部に連絡を入れ、阿笠邸の玄関で落ち合った。

灰原も無事に外から帰って来て、幸い擦れ違う事も無かった。

俺達三人は地下室で時間を潰している所だ。

「さて、あと十分で元に戻るみてーだな。」

俺は時計を見ながらそう言った。

時刻は、五時五十分を少し過ぎた所だ。

「工藤君…、今回の実験は失敗だったわ。」

灰原はとて残念そうな顔をしていた。

「えっ…ああ、気にすんなよ！体の方は何ともねえんだからさ！」

「そや！失敗は成功の元って言うやろ？」

肩を落としている灰原を見ると、そう言わずにはいらなかった。

「ありがとう…解毒剤は必ず完成させるわ。」

顔を見られない様に背を向けると、灰原は小さな声で言った。

（俺は…、解毒剤なんか永遠に完成しなくても構わない。お前さえいれば、それで良いんだ…。）

今にも言葉に出してしまいそうな気分だった。

これから、組織絡みの大きな事件や事故があるかもしれない。

でも俺は、灰原を必ず守り抜く事を誓った。

何があっても、必ず守り通してみせる。

それが…、俺の真実の気持ちだから。

（後書き）

どうでした？製作日数およそ四日ですので…、疲れました！初めての短編だったので、かなり下手な文章だったと思いますが…、そこはご法度というわけで許して下さい。関西弁はかなり迷ったんですが、多分良かったんじゃないかと思っています。（自己満足）最後になります、感想はどんどん募集中ですから！連載の方も良かったら読んでみて下さいね！応援に答えますから、感想数でやる気も増えたりします。それでは、最後まで読んで頂き本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1207a/>

真実の気持ち

2011年10月2日23時42分発行